

中学校入学後の友人関係が学校適応感に及ぼす影響 — 関係の親密さと友人の特徴の効果に関する縦断的検討 —

石田 靖彦* 吉田 俊和**

*学校教育講座 (心理学)

**岐阜聖徳学園大学

Longitudinal Effects of Friendship Formation and Features of Friends on Adjustment to a Junior High School

Yasuhiko ISHIDA* and Toshikazu YOSHIDA**

*Department of School Education (Psychology), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Gifu Shotoku Gakuen University, Gifu 501-6194, Japan

問題と目的

近年、小学校から中学校にかけての環境の変化に適応できずに、学習意欲を低下させたり不登校に陥ったりする生徒が問題になっている。

中学校入学後の学習意欲の低下や学業不振といった学習面での不適応については、学習環境の変化が関連していると考えられるが、それだけでなく、親しい友人関係の形成や彼らからのサポートといった社会的な要因も影響していることが指摘されている(新潟県教育委員会, 2005)。五十嵐(2011)は、小学校6年生から中学校1年生にかけてのサポートの変化と不登校傾向の変化との関連について縦断的に検討し、在宅を希望する不登校傾向の増大が教師や級友からのサポートの低さと関連していることを明らかにした。これらの研究は、中学校入学後に親しい友人を形成できるかどうか、学業を含めた中学校での適応に影響を及ぼすことを示している。

ただし、中学校入学後の友人関係の形成と適応感との関連を縦断的に検討した研究は少なく、しかも必ずしも一貫した結果が得られているわけではない。小野寺(2009)は、小学校6年生から中学校1年生にかけての学校嫌い感情の変化を縦断的に測定し、学校嫌い感情が中1の5月から12月にかけて高まること、また学校嫌い感情は教師からのサポートの多さで低減するが、級友からのサポートの多さは関連しないという結果を報告している。石田(2003)は、中学校入学後の適応感の推移を5月、7月、12月の3回にわたって測定し、学業面と対人面の適応感とはともに低下すること、また学級内に多くの友人がいることは対人面での適応感を高めるが、学業面での適応感とは関連が低く、学業成

績については負の関係にあることを報告している。これらの研究は、新たな環境での友人関係の形成が学校適応に及ぼす影響は、適応の領域によって異なっており、学校への適応を促進する場合もあれば阻害する場合もあることを示唆している。

しかしながら、これまでの研究にはいくつかの問題があった。第1は、学校適応感を測定する尺度である。石田(2003)で使用された尺度は、学校適応感を対人面と学習面におおまかに分類したもので、学校適応感を多面的に測定したものではない。新たな学校での友人関係の形成という社会的な要因が、どの側面の適応感を高め、どの側面の適応感が高めないのかを明らかにするには、新たな環境での適応感を多面的に測定する必要がある。

第2の問題は、学級内の友人関係の測定である。石田(2003)で測定された友人関係は、一緒に遊んだりおしゃべりをするといった、実際の交友活動をもとにした学級内の友人の多さであって、その友人との関係の親密さや、その友人がどのような生徒であるかという友人の特徴については検討していない。Berndt(2002)は、中学校での新たな友人関係が生徒の適応過程に及ぼす影響には、友人との関係の親密さの効果と友人の特徴の効果という2つの異なる効果が混在しており、それらを区別して検討する必要があると主張している。

そこで本研究では、中学校新入生の学校適応感を多面的に測定できる尺度を用いて測定し、学級内で形成された友人関係がその後の適応感に及ぼす影響を、関係の親密さの効果と友人の特徴の効果とを区別して検討する。

関係の親密さと友人の特徴が、生徒の適応感に及ぼ

す影響については、以下のように予測される。

まず、関係の親密さの効果については、学習面での適応感といった友人関係以外の適応感をも高める効果があると予測される。学校での大半の時間を過ごす学級において、親しい友人がいるかどうかは、授業を含めた学校でのさまざまな活動に大きな影響を及ぼすと考えられるからである。

一方、友人の特徴の効果については、生徒の適応感を促進する場合もあれば逆に低下させる場合があると考えられる。多くの時間を共有する友人同士は相互に影響を及ぼしあっており、適応感の高い友人をもつ生徒は自分の適応感も高められるのに対し、適応感の低い友人を持つ生徒は低下すると考えられるからである。たとえば、授業に対して意欲的で熱心に取り組む友人と一緒にいれば、自分も授業に対して意欲的になるだろうが、勉強に対する興味が乏しく、教師に対して反発する生徒と一緒にいれば、自分も学習に対する意欲を低下させたり、教師に対する反発を高めたりするだろう。しかもこのような友人からの影響は、彼らとの関係が親密であるほど強いと考えられるため、この友人の特徴の効果は彼らとの関係が親密さであるほど顕著に認められると予測される（関係の親密さによる友人の特徴の調整効果）。

Berndt, Hawkins, & Jiao (1999) は、上記の予測に基づいて、中学校入学後の友人関係が学校での活動や行動に及ぼす影響について縦断的に検討した。そして、友人関係の親密さと友人の特徴は、学校での生徒の活動や行動に対して異なる影響を及ぼすことを明らかにした。ただし、その効果は測定された活動や行動によって異なっており、一貫した結果は見いだせていない。これは、Berndt の用いた指標が学業や学校生活への積極的な取り組みといった行動的指標であって、学習意欲や学校生活への満足感といった主観的な指標は用いられなかったことが関連していると考えられる。友人との関係の親密さや友人の特徴は、生徒の学校での行動に直接影響を及ぼすのではなく、学業や教師、学校に対する態度や姿勢といった内面的な側面に影響を及ぼし、それが結果として目に見える行動となって現れると考えられるからである。

そこで本研究では、中学校入学後の生徒の主観的な適応感に着目し、中学校入学後に形成された友人関係が生徒の適応感に及ぼす影響について、関係の親密さと友人の特徴を区別して検討する。具体的な仮説は以下のとおりである。

仮説1 親密な友人関係を形成した生徒はそうでない生徒にくらべて、学校への適応感が高くなるだろう＝関係の親密さの効果。

仮説2 友人の適応感が高い場合は自分の適応感も高くなるのに対し、友人の適応感が低い場合には自分の適応感は低くなるだろう＝友人の特徴の効果。

仮説3 友人の適応感が自分の適応感に及ぼす影響は、その友人との関係の親密さによって異なるだろう。すなわち、友人との関係が親密な場合は友人の適応感の影響を強く受けるのに対し、友人との関係が親密でない場合は友人の適応感の影響は小さいだろう＝関係の親密さによる友人の特徴の調整効果。

方法

調査対象

A県下のB中学校に入学した1年生4学級、計160名（男子80名、女子80名）を対象とした。この中学校は、学校の方針として学力や性格面で多様な生徒を受け入れており、入学当初、生徒同士はお互いに面識がなかった。入学に際して学習や適性に関する検査が行われるという点で一般の公立中学校とは異なるが、学級内の友人関係の形成と学校への適応過程を、入学当初から縦断的に検討するには望ましい調査対象と考えられた。

調査内容と調査時期

学校適応感に関する調査は、中学校入学後の5月上旬、7月上旬、12月上旬の3回実施した。また学級内の友人関係に関する調査は、5月上旬と12月上旬の2回実施した。

調査の実施に際しては、調査の目的とデータの守秘について調査対象者に十分説明し、回答したくない場合は回答しなくてよいことを教示した。

(1) 生徒の学校適応感：石田（2009）の学校適応感尺度16項目を使用した。この尺度は、児童生徒の主観的な適応状態としての適応感を、「学習関係」「友人関係」「教師関係」「学校全体」の4つの側面にわけて測定するものである。後述するように、本研究では、「友人関係」の下位尺度得点を、友人との「関係の親密さ」の指標としても使用した。

(2) 学級内の交友相手の調査 5月の下旬および12月中旬の2回にわたって学級内の交友相手を測定した。対象は同性のクラスメイトに絞り「よく一緒に遊ぶ友だち」について4名を限度に記名させた。後述するように、ここで記名されたクラスメイトの適応感の平均値を、「友人の特徴」の指標として使用した。

結果

学校適応感の下位尺度得点の算出とその推移

学校適応感尺度16項目について、5月、7月、12月のデータを込みにした因子分析（主因子解）を行った。その結果、石田（2009）と同様の「学習関係」「友人関係」「学校全体」「教師関係」の4つの因子を抽出した。結果をTable 1に示す。

Table 1 学校適応感尺度の因子分析結果（主因子法, promax回転後）

項目	I	II	III	IV	h^2
「学習関係 ($\alpha=.83$)」					
2. この学校の授業はつまらないと思う	-.87	.03	.15	.03	.61
6. この学校の授業を受けるのは楽しい	.75	-.06	.11	.10	.72
11. この学校の先生に対して不満がある	-.60	-.05	.09	-.16	.46
14. この学校の授業ではやる気がわいてくる	.52	.04	.14	.11	.48
10. この学校ではいっしょうけんめい授業をうけたいと思う	.50	.06	.29	-.16	.42
「友人関係 ($\alpha=.76$)」					
9. この学校には、よい友だちがたくさんいると思う	.01	.81	.10	-.04	.75
1. この学校の友だちといっしょにいると楽しい	-.14	.74	-.02	.13	.55
5. この学校の友だちとの関係に不満がある	-.25	-.63	.18	.13	.36
13. この学校の友だちとは何でも話すことができると思う	-.10	.62	.03	.14	.46
「学校全体 ($\alpha=.76$)」					
4. この学校の生徒であることをほこりに思う	-.10	-.03	.88	.03	.69
8. この学校の生徒であることがうれしい	.05	.00	.85	-.01	.75
12. この学校を離れるとしたら、とてもつらいと思う	.07	.26	.46	-.09	.42
15. この学校の生徒であることを、強く意識している	-.01	-.09	.47	.08	.21
「教師関係 ($\alpha=.81$)」					
7. この学校の先生に対して親しみを感じる	.10	-.09	.09	.76	.69
16. この学校では先生と気軽に話ができると思う	-.03	.07	-.01	.76	.59
3. この学校の先生には安心して何でも相談できると思う	.08	.08	-.03	.65	.52
寄与率 (%)	25.6	23.0	26.9	22.6	
因子間相関: I		.37	.55	.54	
II	.37		.60	.41	
III	.55	.60		.50	
IV	.54	.41	.50		

注：固有値の減衰状況は、6.07, 1.87, 1.28, 1.19, 0.78, 0.72, …であった。

先行研究とは異なり，“この学校の先生に対して不満がある”という項目が学習関係に高い負荷を示した。下位尺度の信頼性と妥当性は石田（2009）で確認されているが、本研究では下位尺度得点の間の相関を低くするために、この項目を学習関係に分類して下位尺度得点を算出した。調査時期を込みにした下位尺度の α 係数は、学習関係で $\alpha=.83$ 、友人関係で $\alpha=.76$ 、学校全体で $\alpha=.76$ 、教師関係で $\alpha=.81$ であり、いずれも高い内的整合性が確認された。

次に、適応感の下位尺度得点の推移を男女別に算出した。結果をTable 2に示す。

5月、7月、12月の調査において欠損値のなかった調査対象者（男子 $n=73$ 、女子 $n=76$ ）を分析対象として、学校適応感の下位尺度得点ごとに、性別×時期の分散分析を行った。その結果、いずれの下位尺度得点でも時期の主効果が有意となった（友人関係 $F(2, 294) = 4.93, p<.01$ ；学習関係 $F(2, 294) = 12.50, p<.001$ ；教師関係 $F(2, 294) = 11.45, p<.001$ ；学校全体 $F(2, 294) = 14.06, p<.001$ ）。HSD法による多重比較を行ったところ、学習関係と教師関係に関する適応感は5月から7月（いずれも $p<.05$ ）、7月から12月（学習関係 $p<.01$ ；教師関係 $p<.05$ ）にかけて単調に減少することが示され

Table 2 各調査時期における学校適応感の平均値と標準偏差

	5月	7月	12月
〈男子〉			
友人関係	16.86 (.35)	16.40 (.36)	15.70 (.37)
学習関係	19.90 (.42)	19.10 (.44)	18.51 (.41)
教師関係	11.92 (.27)	11.60 (.31)	10.90 (.32)
学校全体	16.40 (.32)	16.48 (.36)	14.82 (.36)
〈女子〉			
友人関係	16.03 (.34)	15.42 (.36)	15.66 (.36)
学習関係	19.91 (.41)	19.29 (.43)	18.63 (.40)
教師関係	11.83 (.26)	11.26 (.30)	11.09 (.31)
学校全体	16.66 (.31)	16.01 (.36)	16.01 (.35)

た。友人関係に関する適応感は5月から7月にかけて低下する傾向にあるが（ $p<.10$ ）、7月から12月にかけては変化がないこと、また学校全体の適応感は5月から7月には変化がなく7月から12月にかけて低下すること（ $p<.01$ ）が示された。また、学校全体に関する適応感では、性別×調査時期の交互作用効果が認められ（ $F(2, 294) = 7.28, p<.001$ ）、下位検定の結果、男子の学校全体の適応感は7月から12月にかけて低下するのに

対し ($p<.01$), 女子では5月から7月にかけて低下する傾向にあること ($p<.10$) が示された。

生徒の適応感と友人の適応感の関連

本研究では学級内の友人関係に関する記名調査を5月と12月の2回実施した。そのため、各下位尺度得点における自分と友人の相関についても、5月の友人を基準とした場合と12月の友人を基準にした場合の2種類の相関係数を算出した。「友人の特徴」の指標としての友人の適応感は、5月あるいは12月に記名されたクラスメイトの、5月、7月、12月での適応感の平均値をそれぞれ使用した。結果をTable 3に示す。なお、5月と12月の双方において記名された友人の重複率は、男子で32.3% ($SD=32.1$) 女子で39.6% ($SD=27.2$) であった。

男子では、5月の友人を基準にした場合、5月と12月のいずれの時点でも自分と友人の適応感に有意な相関は示されなかった。12月の友人を基準とした場合は、5月と7月では有意な相関は示されなかったが、12月では、友人関係、学習関係、学校全体の適応感で自分と友人の間に正の相関が示された。5月から12月にかけての交友相手の重複率は3割程度と低かったため、友人の影響を受けて適応感が変化したのか、自分に類似した相手を選択するようになったのかは明らかでないが、5月の友人同士よりも12月の友人同士の方が、適応感においてより類似しているといえるだろう。

一方、女子では、5月の友人を基準にした場合でも、5月、7月、12月の時点での自分と友人の適応感に有意な正の相関が示された。12月の友人を基準にした場合は、5月の時点では有意な相関は示されなかったが、7月と12月の時点では正の相関が示された。女子の友人関係の重複率は4割程度であり男子と大差はないが、女子は5月の時点ですでに適応感において類似した友人と交友していることを示唆している。

Table 3 学校適応感の下位尺度得点における、生徒と友人との相関

	5月の友人を基準			12月の友人を基準		
	5月	7月	12月	5月	7月	12月
(男子)						
友人関係	.16	.03	.07	.05	.00	.28 *
学習関係	-.14	.12	-.16	.12	.04	.25 *
教師関係	.09	.17	.02	.07	.03	.02
学校全体	.19	.00	.17	.01	-.16	.23 †
(女子)						
友人関係	.03	-.06	.14	.00	-.04	.20 †
学習関係	.27 *	.35 **	.24 *	.19	.33 **	.31 **
教師関係	.22 *	.27 *	-.16	.12	.30 **	.06
学校全体	.14	.25 *	.19	.04	-.13	.20 †

注: ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$

5月の関係の親密さと友人の適応感が、7月と12月の適応感に及ぼす影響

5月の時点での友人関係は固定的なものではないものの、新しい学級において親しい友人ができたかどうか、またその友人がどのような生徒であるかという友人の特徴は、その後の生徒の適応感に影響を及ぼすと考えられる。

そこで本研究では、5月の時点での友人関係に着目し、その友人との関係の親密さと友人の適応感の高さが、生徒の7月と12月の時点での適応感に及ぼす影響を重回帰分析を用いて検討した。具体的には、7月あるいは12月の自己の適応感を基準変数とし、5月の自分の適応感を統制変数として投入した上で、5月の時点での関係の親密さ、友人の適応感、及びその交互作用項を説明変数として投入した。関係の親密さの指標は、5月の友人関係に関する適応感を使用し、5月の自分の適応感、友人の適応感は基準変数に対応する適応感をそれぞれ使用した。なお交互作用項の算出に際しては、説明変数間の相関を抑制するために平均偏差の積を用い、Aikin & West (1991) に従って、分析に際してはすべての変数を標準化した値を使用した。結果をTable 4に示す。

男子の7月の分析では、学習関係と学校全体の適応感において関係の親密さの効果が認められ (それぞれ $\beta=.29$, $p<.001$; $\beta=.28$, $p<.05$), 5月の時点での友人関係が親密であるほど7月の学習関係や学校全体の適応感が高いことが示された。学習関係の適応感では、12月の分析でも関係の親密さの効果傾向が示された ($\beta=.20$, $p<.10$)。これらの結果は、親密な友人関係の形成がその後の適応感にプラスの影響を及ぼすことを示しており、仮説1を支持している。

友人の特徴の効果については有意な結果は示されず、仮説2は支持されなかったが、7月の学習関係の適応感において、関係の親密さと友人の特徴の交互作用が有意になった ($\beta=.22$, $p<.05$)。

Figure 1は、この交互作用効果を解釈するためにAikin & West (1991) にしたがって、関係の親密さが高い場合 (関係の親密さ=平均値+1SD)、中程度の場合 (関係の親密さ=平均値)、低い場合 (関係の親密さ=平均値-1SD) ごとに回帰直線を示したものである。

Figure 1より、全体的に関係が親密である場合ほど学習関係の適応感が高くなっており、先述した関係の親密さの効果が見て取れる。また友人の学習関係の適応感が生徒の学習関係の適応感に及ぼす影響は、関係の親密さの程度によって逆の関係にあることが見て取れる。すなわち、友人との関係が親密である場合は、友人の学習関係の適応感が高いほど生徒の学習関係の適応感も高くなるのに対し、友人との関係が親密でない場合は、友人の学習関係の適応感が高いほど生徒の学習関係の適応感は低下することが示された。関係が

Table 4 5月の友人関係の親密さと友人の適応感が7月、12月の適応感に及ぼす影響

説明変数	基準変数					
	7月			12月		
	学習関係	教師関係	学校全体	学習関係	教師関係	学校全体
〈男子〉						
1. 自分の適応感 (5月)	.50 **	.61 **	.43 **	.42 **	.50 **	.56 **
2. 関係の親密さ (5月)	.29 **	-.03	.28 *	.20 †	.10	.02
3. 友人の適応感 (5月)	.02	.02	-.11	-.02	.09	-.06
4. 2と3の交互作用項	.22 *	.15	-.04	-.03	-.16	-.05
R^2	.52 **	.38 **	.41 **	.27 **	.31 **	.34 **
〈女子〉						
1. 自分の適応感 (5月)	.69 **	.66 **	.60 **	.51 **	.61 **	.67 **
2. 関係の親密さ (5月)	.05	.04	.08	-.02	.00	.02
3. 友人の適応感 (5月)	.12	.04	.13	.13	-.04	.09
4. 2と3の交互作用項	.02	.01	-.09	.10	.12	-.06
R^2	.56 **	.46 **	.46 **	.29 **	.37 **	.51 **

注1: ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

注2: 「自分の適応感 (5月)」「友人の適応感 (5月)」はそれぞれ基準変数に対応する適応感で分析されている。すなわち「学習関係」を基準変数とする分析では「自分の学習関係の適応感 (5月)」「友人の学習関係の適応感 (5月)」が用いられている。また「関係の親密さ (5月)」については「友人関係の適応感 (5月)」を使用した。

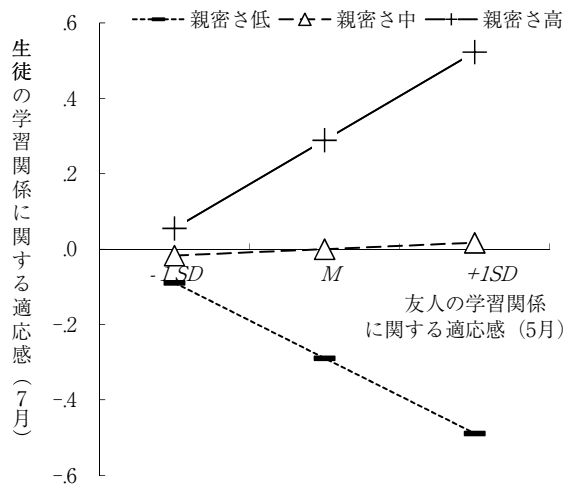


Figure 1 5月の友人関係の親密さと友人の学習適応感が7月の学習適応感に及ぼす影響

親密でない場合において、友人の適応感の高さが生徒の適応感を低下させるという結果は本研究の予測とは異なるが、関係の親密さが友人の特徴の効果を調整していることは示されており、仮説3は部分的に支持されたといえよう。

一方、女子では、7月、12月のいずれの分析においても、関係の親密さの効果、友人の特徴の効果及びその交互作用効果は有意とはならず、仮説1、仮説2、仮説3はいずれも支持されなかった。適応感における生徒と友人との相関分析では、女子は5月の時点ですでに自分に類似した友人と交友していることが示されており、友人からの影響を検出できなかった可能性がある。

考察

本研究では、中学校入学後の適応感の推移を検討するとともに、友人との関係の親密さと友人の適応感が生徒の適応感に及ぼす影響を縦断的に検討した。

中学校入学後の適応感の推移については、時期や適応感の側面によって違いがあるものの、学習関係、教師関係、友人関係、学校全体のいずれの側面でも低下することが明らかとなった。このような適応感の低下には、入学前に抱いていた期待と入学後の現実のギャップが影響していると考えられる。中学校は小学校にくらべて学習進度が早く、その習熟度は定期テストで客観的に比較されることになる。教師との関係については教科担任制になることで、教師からの細やかなサポートが受けにくくなる。このような学習環境の変化が、学校や学習に対する意欲や満足感を低下させるとともに、教師や学校全体に対する満足感も低下させたと考えられる。

このように中学校入学後の適応感全般に低下することが示されたが、親しい友人を形成できた生徒とできなかった生徒では、その後の適応感はどうに異なるだろうか。この点について本研究では、友人との関係の親密さの効果と友人の特徴の効果を区別して検討した。その結果、関係の親密さの効果については、男子の学習関係と学校全体に関する適応感で認められ、5月の時点での友人との関係が親密であるほど7月の学習関係と学校全体に対する適応感が高いことが示された。また学習関係の適応感では、関係の親密さの効果が12月の時点でも認められることが明らかとなった。以上の結果は、親密な友人関係の形成といった社

会的な要因が、学習や学校に対する適応感にも影響を及ぼすことを示しており、入学後の早い段階において親しい友人関係を形成できるかどうかが中学校での適応において重要であることを示している。

友人の特徴の効果については、男女いずれも示されず、仮説2は支持されなかった。しかし、仮説3については、男子の学習関係の適応感において関係の親密さと友人の特徴の交互作用効果が認められ、友人との関係が親密である場合は友人の学習面での適応感が高さは生徒の学習面での適応感を高めるが、友人との関係が親密でない場合は友人の適応感の高さは生徒の適応感を低下させることが明らかとなった。この結果は、関係が親密である場合は友人からの影響を強く受けるという仮説3を部分的に支持している。

関係が親密である場合において、自分と友人の学習面での適応感が自分の適応感の高さにプラスの影響を及ぼすという結果については、友人からの社会的影響や友人からのサポートが関連していると考えられる。親しい友人は、自分の考え方や行動を参照する準拠枠として機能しており、学習に対する態度や行動においてもお互いに類似していることが明らかにされている (Altermatt & Pomarantz, 2003; Wentzel, Barry, & Caldwell, 2004)。またこのような友人からの影響は、友人との関係が親密であるほど顕著であることも明らかにされており (Ryan, 2000; 2001)、本研究の結果は、これらの知見を支持する結果といえるだろう。

一方、関係が親密でない場合については、友人の学習に関する適応感が高いほど生徒の学習に対する適応感低下することが明らかとなった。これは予測とは異なる結果であるために推測の域を出ないが、防衛的な自己評価維持という観点から解釈できるかもしれない。Tesser & Campbell (1985) によれば、学業成績といった自他の優劣が付きやすい側面において自分よりも友人が勝っていることは自己評価の低下を招くため、そのような状況におかれた人は、その友人との心理的距離を広げるか、その領域に関する重要度の認知を下げることによって自己評価の低下を防ごうとすると述べている。本研究で測定された学習に関する適応感とは、学業成績といった自他の優劣を測定しているわけではないものの、学習に対する意欲や感情を含んでおり、中学校では評価の対象になるものである。そのため、関係があまり親密ではない友人は同一視や準拠集団ではなく、自己評価を左右する比較対象として機能し、学習に関する適応感の高い友人をもつ生徒ほど自身の学習に関する適応感を低下させたのではないかと考えられる。ただしこのような解釈は推察の域を出ない。この点については、より詳細に検討する必要がある。

ところで、本研究では男子と女子では結果が異なっており、女子では、7月、12月のいずれの分析でも、関

係の親密さや友人の特徴の効果は見いだせなかった。これについては、女子における適応感の安定性の高さが関連している可能性がある。女子は男子にくらべて適応感の安定性が高く、重回帰分析の結果でも、7月、12月の学習関係、教師関係、学校全体の適応感統制変数である5月の自己の適応感に強く規定されていた。つまり、女子における学習関係や教師関係、学校全体への適応感比較的安定しているために、適応感の変化を検出できなかったと考えられる。

また友人の特徴の効果は、関係の親密性との交互作用効果を含めて、女子では認められなかった点については、男女における友人関係の形成過程の違いが挙げられるかもしれない。石田 (2005) は、中学校進学後に形成された友人との類似性について縦断的に検討し、女子は知り合って間もない時点から自分に類似した友人と交友していることを明らかにした。本研究でも、女子は5月の時点で適応感において類似した相手と交友していることが示唆された。つまり、女子はすでに自分と類似した友人と交友しているために、相手からの影響をあまり受けなかったことが考えられる。

とはいえ、類似した友人であっても長期間にわたって行動をとるとすれば、彼らからの影響も強くなるであろうし、学級内の友人関係が安定し固定化した段階では、男女の違いも少ないと考えられる。今後は、学級内の友人関係が安定し固定化した時点での友人関係に焦点を当て、学習面での適応感に及ぼす友人からの影響について詳細に検討し、結果の頑健性と一般化可能性を明らかにする必要がある。

引用文献

- Aikin, L. S., & West, S. G. (1991). *Multiple regression: Testing and interpreting interactions*. Newbury Park: Sage Publications.
- Altermatt, E. R., & Pomerantz, E. M. (2003). The development of competence-related and motivational beliefs: An investigation of similarity and influence among friends. *Journal of Educational Psychology, 95*, 111-123.
- Berndt, T. J. (2002). Friendship quality and social development. *Current directions in Psychological Sciences, 11*, 7-10.
- Berndt, T., Hawkins, J. A., & Jiao, Z. (1999). Influences of friends and friendships on adolescent to junior high school. *Merrill-Palmer Quarterly, 45*, 13-41.
- Hirsch, B., & Rapkin, B. D. (1987). The transition to junior high school: A longitudinal study of self-esteem, psychological symptomatology, school life, and social support. *Child Development, 58*, 1235-1243.
- 五十嵐哲也 (2011). 中学校進学に伴う不登校傾向の増減に関連するソーシャルサポート 愛知教育大学研究報告 (教育科学編), **60**, 81-87.
- 石田靖彦 (2003). 学級内の交友関係の形成と適応過程に関する縦断的研究 愛知教育大学研究報告 (教育科学編), **52**, 147-152.
- 石田靖彦 (2005). 中学校新入生の交友関係の形成過程に関する

- 縦断的研究—動機づけ志向性における類似性の観点から—
東海心理学研究, **1**, 39-44.
- 石田靖彦 (2009). 学校適応感尺度の作成と信頼性, 妥当性の検討—生徒評定と教師評定を用いた他特性—他方法相関行列からの検討— 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, **12**, 287-292.
- 新潟県教育委員会 (2005). 中1ギャップ解消調査研究事業報告書
- 小野寺汐美 (2009). 小中移行期における学校適応過程に関する一研究 岩手大学大学院人文社会科学部研究科紀要, **18**, 19-40.
- Ryan, A. M. (2000). Peer groups as a context for the socialization of adolescents' motivation, engagement, and achievement in school. *Educational Psychologist*, **35**, 101-111.
- Ryan, A. M. (2001). The peer group as a context for the development of young adolescent motivation and achievement. *Child Development*, **72**, 1135-1150.
- Tesser, A., & Campbell, J. (1985). A self-evaluation maintenance model of student motivation. In R. Ames & C. Ames (Eds.), *Research on motivation in education: Vol.2. The classroom milieu*. Orlando: Academic Press. Pp. 217-247.
- Wentzel, K. R., Barry, C. M., & Caldwell, K. A. (2004). Friendships in middle school: Influences on motivation and school adjustment. *Journal of Educational Psychology*, **96**, 195-203.

(2014年9月24日受理)